



第19回データビジネス創造コンテスト

商・新島ゼミ

経営・中村ゼミ

3組が入賞

商学部・新島裕基ゼミ「サステナブル購買」がと経営学部・中村世名ゼミの3年次生3チームが、第19回データビジネス創造コンテストで入賞した。

慶應義塾大学SFC研究所データビジネス創造コンソーシアム主催、ビジネスパートナーとして電通デジタルを迎えて開催した。「水のサステナ

データビジネス創造コンテストで入賞した新島ゼミ、中村ゼミの学生

ん」は未来創造賞を受賞。身近にある花を撮影し、土壌改善や地下水にアプローチする、というアイデアで、「データ解析を学びながら、マーケティングや経営の知識を使い、自由な発想で取り組めた」と話す。

新島ゼミ森下チーム(森下悠来さん、長谷川ももさん、上田葵さん)は、天気予報と連動した通知機能を持たせた折り畳み傘を提案し、審査員特別賞を受賞した。最終審査ではAIを活用してCMを作成。「英語での

公務員試験講座 合格者報告会



体験談を伝える4年次生

4年次生は使用した参考書やノート、スケジュール帳を公開し、勉強方法や試験対策を見据えた自治体研究の仕方などを語った。「確実に押さえるべきではない科目とそうでない科目を見極め、勉強時間を配分する」などの対策に、後輩たちは深くうなずいていた。

国家総合職・国際・人文区分などに合格した大村めいさん(人間科学4)は、「思ったように成績が伸びなかった時、先輩に聞いた勉強法を取り入れたことが良い結果につながった。短期、長期で目標を設定し、そこに向けて努力しよう」と後輩にエールを送った。

行われた。国家総合職、試験講座の受講生で、今年東京都特別区などの合格者のうち有志10人が、公務員志望の3年次生に合格に向けてポイントを伝えた。

文・松本ゼミ

麻生区舞台にスタンプラリー企画

市民交えワークショップ

「地域とコンテンツ産業」をテーマに活動する文学部の松本淳ゼミが、川崎市麻生区にある文化振興拠点「川崎市アートセンター」と連携し、同区を舞台にしたスタンプラリーを企画。12月から来年5月にかけて開催する予定で、現在準備を進めている。

職業もさまざまなメンバーとの交流を楽しんだ。麻生区の「自然が豊かな芸術活動が盛ん」といった魅力を踏まえ、「テーマを分けて複数のコースを用意できないか」「地元



学生と社会人が一緒にアイデアを考えた

は、ゼミ内で議論を重ねてきたが、専門的な知見を持った方々のアイデアを聞き、視野が広がったと手応えを語った。松本特任教授は、「地域の活力が低下するなか、若者の力に期待が寄せられている。学生たちの興味・関心を、プロジェクトを通じて地域に還元してほしい」と話した。

商・奥瀬ゼミ

新潟県妙高市で合宿

商学部の奥瀬喜之ゼミは、9月9〜11日、新潟県妙高市でゼミ合宿を行った。同市内を中心にフィールドワークを実施し、合宿最終日に妙高市役所にて市職員、地域企業の事業

市役所で地域活性化策を提案

市役所

市役所



市職員や地元企業に地域活性化策を提案した

1日目は4グループに分かれて、妙高市内を中心にフィールドワークを行った。地酒の酒蔵である君の井酒造など、妙高市ならではの店舗を中心に訪問し、市民の方々に聞き取り調査した。

2日目は午前中、全員で苗名滝、いもり池などの著名な観光地のほか、道の駅として日本一の売り上げを誇ったこともある道の駅あらいを視察。午後はグループごとに、市役所市内の事業者や市職員から妙高市の現状について説明を聞き、懇談を行った。

最終日に2日間の活動を踏まえ、市役所で地域活性化のための提案発表会を開催。それぞれのグループが関係人口、定住人口を増加させるための施策を提案した。レンタサイクルを活用した観光の提案、市の特産品である辛味調味料「かんずり」を使った商品企画の提案、市出



君の井酒造を見学するゼミ生

を行った。最終日に2日間の活動を踏まえ、市役所で地域活性化のための提案発表会を開催。それぞれのグループが関係人口、定住人口を増加させるための施策を提案した。レンタサイクルを活用した観光の提案、市の特産品である辛味調味料「かんずり」を使った商品企画の提案、市出

身のYouTuberであるヒカキンを起用したプロモーションなどをプレゼンした。今回の発表会は、これまでの奥瀬ゼミの活動でも連携している、妙高市への移住を促進しているNPO法人はねうまネットワークの東智隆氏のご協力を得て実現した。

奥瀬ゼミでは、来年度以降も夏合宿で妙高市を訪問し、妙高市の地域活性化を支援していく予定だ。

専修人の新しき本

刻印
満蒙開拓団、黒川村の女性たち



松原文枝 著

戦後80年、歴史修正の動きがある中で、史実を埋もれさせない。戦時中、岐阜県の旧黒川村から満洲に渡った黒川開拓団。敗戦により現

地住民から襲撃を受ける中、生きて日本に帰るために警護を頼んだのは敵であるソ連軍だった。その見返りに黒川団は、18

歳以上の未婚の女性15人をソ連兵の性の相手として差し出したのだ。

この事実は70年余り封印されてきた。だが、女性たちが社会の目や強者におもねることなく公にした。

女性たちの勇気と覚悟の告白に突き動かされていく戦後世代。今の遺族会会長らが、隠されてきた事実を認め、碑文に刻み、謝罪した。女性たちは尊厳を回復していく。その過程は感動的ですがある。トラウマと抑圧からの解放。史実は教育現場にまで広がった。

映画『黒川の女たち』を深堀りし、満洲の実相と女性たちの生き方を描いた一冊(KADOKAWA・税込1,080円)著者(まつばら・ふみえ)文学部特任教授。放送ジャーナリズム。



渡辺達朗・山崎万緋 著

神保町は英誌『タイムアウト』の「2025年世界で最もクールな街」ランキング1位に選出された。神保町のまちは多様な人々から愛され、ますます注目されるようになっている。

その中心にある神田神保町古書店街の戦前・戦時下の姿を存じだろつか。古書組合への組織統制、公定価格設定による

価格統制、品ぞろえの規制や勤労動員などを通じて思想言論統制の三位一体を進められた戦時統制のもとで、古書店主・店員たちはいかに経済活動を展開し、生活してきたのか。そんな問題意識をもとに、神田神保町古書店街の生成から現在に至るダイナミックな変化と

将来について、膨大な資料に基づいて検討した。筆者らが、本書を上梓した背景には、現在の社会的風潮に対する危機感がある。(有斐閣・税込4,950円)

著者(わたなべ・たつろう) 商学部教授。流通政策論(やまさき・まい) 商学部兼任講師。流通政策論。